

## 1

次のそれぞれの文の——線部の、漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字で書いて答えなさい。

- (1) 危険の芽を摘む。  
 (2) 表情が和らぐ。  
 (3) 眺望のきく高台。  
 (4) 治安の悪い町。  
 (5) 客をマネく。  
 (6) 道をアヤマる。  
 (7) 母をソクケイする。  
 (8) コテイにせずむ宝。

## 2

次のそれぞれの問いに答えなさい。

- (1) 次の①～⑥の組み合わせが、それぞれ対義語どうしの組み合わせになるように、に入る適切な漢字一字を書いて答えなさい。
- |   |                        |   |                      |   |
|---|------------------------|---|----------------------|---|
| ① | 正常                     | ↓ | <input type="text"/> | 常 |
| ② | 直接                     | ↓ | <input type="text"/> | 接 |
| ③ | 延長                     | ↓ | <input type="text"/> | 短 |
| ④ | 需要 <small>じゅよう</small> | ↓ | <input type="text"/> | 給 |
| ⑤ | 往路                     | ↓ | <input type="text"/> | 路 |
| ⑥ | 義務                     | ↓ | <input type="text"/> | 利 |
- (2) 次の①～⑥の組み合わせが、それぞれ類義語どうしの組み合わせになるように、に入る適切な漢字一字を書いて答えなさい。
- |   |    |  |                      |   |
|---|----|--|----------------------|---|
| ① | 自然 |  | <input type="text"/> | 然 |
| ② | 同意 |  | <input type="text"/> | 成 |
| ③ | 長所 |  | <input type="text"/> | 点 |
| ④ | 用意 |  | <input type="text"/> | 備 |
| ⑤ | 出版 |  | <input type="text"/> | 行 |
| ⑥ | 遺品 |  | <input type="text"/> | 見 |

## 3

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

先日、<sup>①</sup>ある中学校で生徒に「なぜ勉強をするか」という、厄介な題で話し、終わりに「勉強よりも大切なものがあるということを知るために勉強するのである」と、わかったようなわからないような結論を言って終えたが、もう少しまく伝えられなかったとしても、やがて彼らが自分で探し当てるだろう。そのあと先生にお願いして教室を見せていただいた。机を見たかったのである。

中学一年生が使う椅子に座ってみて、ゆったりした作りのうえ材質もよく、塗りの黄土色も美しいのに感心した。ぼくが短足だといえ膝もつかえず、やはり最近の背が高く、脚の長い中学生の体に合せているようであった。それでつい、ぼくの子供のころの机を思い出した。

七十年以上前の第二次世界大戦で敗けた直後の何も物がなかったときと、物があふれているいまを比較するわけにはいかないが、ぼくは長いこと机と縁がなかった。

<sup>②</sup>入学した村の小学校には教室が二つしかなかったから、ぼくら一年生と二年、三年を合わせた四十人を一つの教室で一人の先生が教えた。四年、五年、六年生も一つの教室で一人の先生が国語から算数まで何もかも教えた。先生が校長先生を含めて三人しかいないので仕方なかった。

このありさまでぼくが勉強のできる子になるはずがなかったが、勉強の時間が短くて嬉しかった。なにしろぼくらの国語の教科書とというのが表紙も何もない四ページきりの紙切れで、そこに何かの文が印刷されているだけのものだった。その四ページの紙切れの文を一年じゅう繰り返し読みたり書き写したりするだけである。

25

20

15

10

5

それに学校での一日は教室に二時間ほどいるだけで、<sup>③</sup>あとは外へ出てグラウンドの草むしりや花壇の手入れ、山へ薪を取りに行ったり校舎裏の畑へカボチャの種をまいたり、ジャガイモ畑の草取りをして三時間ほど過ごすのである。

これでぼくが試験問題を解く能力の高くなる人間になる道理はなかったが、勉強が嫌いなぼくにとって勉強をしなくていい学校は本当に楽しいところであった。

小学校の机は木製のほろで、横長の一つの机に二人が並んで使った。蓋になつていて上面の板を持ち上げると中が本や帳面を入れる箱になつていて、この板の蓋が割れて上で字が書けなくなったことがあり、<sup>④</sup>ぼくはしばらく机の下の床に腹這いになつて勉強したが、とても楽しかった。

ぼくは家へ帰っても勉強部屋や机はなく、宿題をするのも本を読むのもすべて七人の家族がいる茶の間の隅に腹這いになつてだった。自分用の机がほしいと思つたが、そんなことは※であった。村に電気がきていないため、夜の明かりは茶の間の天井にぶら下がっている石油ランプ一つきりなので字を読んだり書いたりできず、冬などぼくは夕食がすむとすぐ六時には蒲団に入つて寝てしまった。それで毎日、十一時間は眠つた。

小学四年のとき父に縦が三十センチ、横二十センチほどの木のミカン箱をもらい、茶の間の隅に置いて机に使つた。(中略)

中学一年になると痛切に勉強机がほしいと思つたが親には言えなかった。相変わらず家族七人がいる茶の間の隅に置いたミカン箱を机にした。

<sup>⑤</sup>村の中学校は小学校の横に馬小屋みたいな小さなぼろ小屋をくつつけたもので、十畳間くらいの一つの教室に中学二年生と三年生の合わせて二十人ほどが勉強していた。二人の先生は小学校と掛

50

45

40

35

30

けもちであった。

そしてぼくら十五人の中学一年生の勉強する教室がないのだった。ぼくが勉強しなくていいと喜んだのも束の間であった。なんと校長先生が自分ら家族が住んでいる校長住宅の茶の間を教室にしたのである。学校の裏にある一戸建ての校長住宅には、奥さんと中学上級生の二人の子供や猫もいるのである。

ところが校長住宅の茶の間には正座して使う飯台が一つあるだけで、そこに六人ほど座るとあとは勉強する台がなく、ぼくらは出窓に座ったり、突っ立ったまま火を消した薪ストーブや金魚鉢の上へアイロン台を載せたのを机にした。残った七、八人は板の床へ腹這いになって教科書を開いた。

ただ困ったことは、ときおり台所からライスカレーのにおいとか\* トウキビを茹でるにおいがしてくることであった。奥さんが家族の食事の用意をしているらしいのだったが、腹がすいているぼくらにしてみれば勉強どころでなかった。

床に腹這いになって勉強するときほとんど生徒が眠ってしまったが、校長先生は起こさずに眠らせておいてくれた。だから六十五年たったいまでもぼくは、学校で家での手伝いの疲れをとるため眠ったり、校舎裏の畑に野菜を作るため肥桶こよけをかついだり、冬に校舎の屋根に上がって雪おろしをしたのが勉強だったと思っっている。

ぼくの場合だが、机を使わなかったことのほうが勉強になった気がするのである。

(注) トウキビ || トウモロコシ。

〈小檜山博「勉強机」より〉

(1) 線①「ある中学校で生徒に『なぜ勉強をするか』という、

厄介な題で話し」とありますが、このことについての「ぼく」の思いとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身も答えがわかっていない状態で話したことで、逆に自分の考えを整理することができてよかった。

イ はつきりと答えを示さなかったことで、子どもたちは勉強についてよく考え、成長していくはずだ。

ウ よくわからない言葉でお茶をにごしてしまったので、子どもたちには悪い大人の例を見せてしまった。

エ 自分の考えがはつきりと伝えられたとは思わないが、子どもたち自身に答え探しは任せてよいだろう。

(2) 線②「入学した村の小学校」について、「ぼく」はどのような場所だったと考えていますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 勉強嫌いになるきっかけを作った、苦々しい場所。

イ 学力を向上させてくれなかった、役に立たない場所。

ウ 勉強をしなくてよい時間が長かった、楽しい場所。

エ 勉強以外で優秀さを発揮できた、自分に合った場所。

(3) 線③「あとは外へ出てグラウンドの草むしりや花壇の手入れ、山へ薪を取りに行ったり校舎裏の畑へカボチャの種をまいたり、ジャガイモ畑の草取りをして三時間ほど過ごす」とありますが、これと同じように、机に向かう勉強以外の学校での活動が具体的に書かれている一文を本文中から探し、その最初の七字を書き抜いて答えなさい。

(4) 線④「ぼくはしばらく机の下の床に腹這いになって勉強した」とありますが、これとは対照的に、現在の子どもたちがよい環境で勉強をしていることがわかる一続きの二文を本文中から探

し、その最初の七字を書き抜いて答えなさい。

(5)     に入る最も適切なことばを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 昔取った杵柄きねづか
- イ 馬の耳に念仏
- ウ 明後日あさっての方向
- エ 夢のまた夢

(6) 線⑤「村の中学校」での生活を「ぼく」はどのように捉えていますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 校長先生のおかげで勉強を無理なく続けることができ、同級生たちと苦楽を分かち合うことができた。

イ 校長先生が勉強をする場を用意してくれたが、とても勉強に集中できる環境とは言えないものだった。

ウ 校長先生が生活を犠牲きせいにして勉強させてくれたので、勉強嫌いの「ぼく」もその気持ちに応えるように勉強した。

エ 校長先生が厳しく生徒たちを見張っており、どうやって手を抜こうかと考えてばかりの日々だった。

(7) 本文中の「ぼく」の思いとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 勉強に集中する環境に恵まれていたとは言えない学生時代だったが、周りの人たちの支えもあって成長できたことには素直に感謝したい。

イ 勉強時間が短いことを純粋じゆんすいに喜んでいた学生時代だったが、その中でも真剣に勉強をしていれば、別の人生を歩めたと思うと後悔の念が残る。

ウ 今の学生たちとは比較にならないほど貧しい学生時代だったが、貧しさゆえに体験したさまざまな出来事によって人生を豊

かにすることができたのだろう。

エ 試験問題を解く力は上がらなかった学生時代だったが、机に向かう勉強以外でやったことが、自分の人生に少なからず影響を与えたのではないか。

## 4

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

じいちゃんのおそう式で、泣いている人はいなかった。

お香のかわりにじいちゃんが大好きだったコーヒーの香りがして、お経きやうのかわりに音楽が流れていた。そのおかげか、やたらに明るくておしゃれなおそう式だった。ほくも鼻の奥がツンとしただけで、なみだは出なかった。

無口なじいちゃんは、たまに口をあけると、イヤミやわけのわからないことをいった。とくに最後の数か月は、すごかった。

「せっかくのオレの旅立ちに、黒い喪服なんか着るなよ。白しろ、白！ お経じゃなくてジャズだ！」とか、「茶の間に仏壇ぶつだんみたいなものを作るんじゃねえぞ。おまえたちを見守ってやるほどヒマじゃねえんだ」とか。

かあちゃんにいわせると、じいちゃんは「\*ニヒルぶった、ただのへそ曲がり」だったらしい。

ニヒルってなんだろう。アヒルじゃないし、デビルでもない。

わからない言葉は辞書でしらべなさい、ってよくいわれるけど、重い辞書をひらくのはめんどくさい。スマホは持っていないし、パソコンのインターネットはかあちゃんの見張りつきでちよつとしか使わせてもらえないし、どうせならもっと楽しいことに使いたい。だから、「ああ、うん、だよね」なんていって、わかったフリをする。まあ、たいていのことはこれでできりぬけられる。

① じいちゃんのおみまいに病院に行ったとき、ねえちゃんとかあちゃんがいなくて、じいちゃんほくに聞いた。

「トール、おまえの人生はどうだ？」

「えっ人生？ うん、かなり楽しいよ」

② ふむ。なんかこまってんだな？

「じいちゃん、楽しいっていつてるじゃん。こまってないよ」

「まあ、まだオモテウラはねえか」

「え？」

「人にはウラガワがあるんだ。知ってつか？」

ほくは、うなずいた。

「オモテがおなかで、ウラはせなかでしょ」

じいちゃんはニヤツと笑った。

「そうじゃない。人からはそうたやすく見えない、ウラの人格のことだ」

ほくは「③ジンカク」という言葉を頭のなかでバラバラにしてみ

たけど、ジンとカクが組み合わさるとやっぱりわかんなくて、「ああ、うん、ジンカクね」なんていった。

「たとえばオレは、おまえら家族が知っている気むずかしくてり

っぱなじいさんってだけじゃない」

じいちゃんのイメージはぜんぜん「りっぱ」じゃないと思うけど、

④ ほくはだまっとうなずいておいた。

「子どものうちはあいまいなんだ。けど、大人になるとな、自分のウラガワをかくして、オモテガワだけを見せるようになる。ちようど月みたいなもんさ」

「月？」

なんで急に月の話になるんだろう？ でも、いつになくたくさんしゃべるじいちゃんだったから、とにかく話を聞いてあげようと思

った。

「ん。月は地球からはオモテしか見えない。知ってんだろ？ ウ

サギがもちついてるなんてえウソがまかり通ってるほうだ」

「う、うん」

5 じいちゃんは、こういうウソがきらいだった。サンタクロースなんて「でっちあげ」だし、\* クリスチャンでもないのにクリスマスを祝うのは「ばかばかしい」し、聖バレンタインの日にチョコレートあげるなんて、チョコレート業界の「<sup>6</sup>インボウだ」って、毎年いつていた。

「けどな、月には、こつちから見えないウラガワがあんだよ。ウサギのいねえ、ムスツとした顔のほうだ。けど、それも月なんだ。わかるか？」

「なんとなく」

「ん。月みてえに、おまえにもウラガワがあるんだ。そのうちかならずはつきりしてくる。<sup>7</sup>冷めたトンジルの脂が分離してうくみてえにな。それを見せないのが大人つてもんだ」

月から、急にトンジル。じいちゃんの話は、よくあつちこつちに飛んだ。そこでひるむと柔軟性じょうなんせいがないとおこられるから、ふつうの顔でうなずいた。

「月のウラガワと、分離して浮いたトンジルの脂ね。ふうん。でも、なんでそれを見せないのが大人なの？」

「さあな。見せないほうがめんどくさくねえからかもしれないな。そいつは、ドロドロした本音ともいうものだったりするからな」

「本音ってドロドロしてるんだ？」

「ん。たまにな。けどトンジルから脂をぜんぶ取ってみろ。うまくもなんともねえだろ」

「つまり、うまみ成分なんだ？」

「うまいことをいうな。だがな、人間の場合、トンジルとちがつて脂をすてられるもんじゃねえ。すてたフリをしたって、そりゃウソつてもんだ。それより、脂をうまく溶けこませて、バランスのとれた自分だけのトンジルを作らなきゃいけねえ。月にトンジルつた

あ、変な組み合わせだけどな、<sup>8</sup>これ忘れんなよ。わかったな？」

「うん、わかった」

って、ぼくはいったけど、ホントはわからなかった。だからそのときの会話をぜんぶ日記に書いておいた。じいちゃんがナゾときみたいなことをいうたびに、ぼくは日記に書いた。話が長すぎて、紙を何枚も貼はり足さなきゃならないこともあった。

このころはまだ、ウラの人格とか月のウラガワとか、トンジルの脂が本音だとか、なんのことだかさっぱりわからなかった。っていうか、今でもよくわからないんだけど。

じいちゃんの「旅立ち」はもう一年も前のことだけど、日記を読み返していると、目を細めて口をへの字にしたじいちゃんが目の前にいるような気がしてくる。

〈佐藤まどか「月にトンジル」より〉

(注) ニヒルれいこく＝冷酷で、非情なさま。

クリスチャンクリスト＝キリスト教の信者。

(1) 線①「じいちゃんのおみまいに病院に行ったとき」とありますが、病院での場面が描かれているのは本文中のここからここまでですか。その最後の一文の終わりの十字（句点も字数に数えます）を書き抜いて答えなさい。

(2) 線②「ふむ。なんかこまってるんだな？」とじいちゃんが言ったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「ぼく」が自分の本心を隠していると感じたから。  
イ「ぼく」の言い方がわざとらしく明るかったから。  
ウ「ぼく」と無理やりにでも話を続けたかったから。

エ「ぼく」をからかって暇つぶしをしたかったから。

- (3) — 線③「ジンカク」、⑥「インボウ」がカタカナで表記されているのは、これらにどのような共通点があるからだと考えられますか。それを説明した次の文の□に入る最も適切なことばを、本文中から六字で書き抜いて答えなさい。

〈「ぼく」が□をして聞いていることばだという共通点。〉

- (4) — 線④「ぼくはだまっつうなずいておいた」とありますが、このときの「ぼく」についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア じいちゃんの、自分をよく見せたい気持ちにはあきれるが、本人の好きに言わせておけばよいと突き放している。

イ じいちゃんの言葉には賛同しかねる部分はあるが、気むずかしいじいちゃんに余計なことは言わないようにしている。

ウ じいちゃんの言葉は間違っているが、それを指摘して大好きなじいちゃんとの会話を終わらせたくないと考えている。

エ じいちゃんの言葉が冗談じょうだんかどうかわからないので、とりあえず無視してその場をやり過ぎそうとしている。

- (5) — 線⑤「じいちゃんは、こういうウソがきらいだった」とありますが、このときじいちゃんが話した「こういうウソ」とは具体的にどんなウソですか。「〜というウソ。」という形で、二十字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。

- (6) — 線⑦「冷めたトンジルの脂が分離してうくみてえにな。それを見せないのが大人ってもんだ」とありますが、大人が見せない「冷めたトンジルの脂」とは、人間のどのようなものを表していますか。最も適切なことばを本文中から八字で書き抜いて答えなさい。

- (7) — 線⑧「これ忘れんなよ。わかったな？」とありますが、じ

いちゃんが伝えたかったのはどのようなことですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分のウラガワの人格をありのままの自分として認め、オモテガワの人格との割合を徐々に逆転じやくてんさせていくことで、生きやすい人生にしていけばよいということ。

イ 自分のウラガワの人格を捨てようとするのではなく、オモテガワの人格の中にうまくまぎれこませて、おもしろみのある大人に成長していけばよいということ。

ウ 自分のウラガワの人格にひそむ弱点を、うまくオモテガワの人格に隠していきながら、他人に弱みを見せることなく生きていけばよいということ。

エ 自分のウラガワの人格を少しずつなくしていくことで、オモテガワの人格をより社交的なものにして、誰とでもうまく付き合っていけばよいということ。

- (8) 本文中の「ぼく」についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人と関わることを極力さげようとするところがあり、数少ない言葉からは自分に対する自信のなさが見え隠れしている。

イ 自分なりに要領よく人付き合いをしているが、理解できないことは記録しておくような素直な一面も持っている。

ウ ひねった言い回しでもすぐに理解するようになしこさがあり、それでいて人の気持ちにも配慮することができる。

エ 何かにつけて面倒くさがるが多く、出来るだけ自分のやりたいことを優先して進めるようにしている。

(これで問題は終わりです)

